

東洋・西洋における“矛盾”という概念から考察する「人間の理性」

1 古代中国（楚の国）における「矛盾」

矛（ほこ）と盾（たて）

どんな盾でも破ることができる矛

どんな矛をも防ぐことができる盾

2 古代ギリシア、エレア学派のゼノン(Zēnōn, 490?-430? B.C.)における「矛盾」

「論理」と「実際」は異なることがある

アキレスと亀の競争

3 「矛盾」の源泉とは何か

「矛盾」と「矛盾」が重なり合ったとき、どのように考えるべきか。

4 二つの概念としての「理性的存在者」

1) 「理性的存在者」としての人間

2) 「“感性的” 理性的存在者」としての人間

哲学(総論・各論) 講義 5

* 東洋・西洋における「矛盾」という概念から考察する
「人間の理性」

Scholē → Schola → school
 ① 余暇 ② 学校
 ② 学問としてのスコラ哲学

古代の「考える」の作用

① 人間の 心 を 考える → 哲学では重要

② 人間の 心 を 感じる

↓
 人間は 考える 「理性的存在者」

「矛盾」という概念から、人間が
 「考える」とは、どのようなことか？

1. 古代中国(楚の国)における矛盾

矛 (ほこ) と 盾 (たて)
 sword shield

軍人向けの商人の言葉 ... つじつまが合わない!

「どんな盾でも破ることができる矛」

「どんな矛をも防ぐことができる盾」

(『韓非子』難一の故事)

2. 古代ギリシア、エレア学派ゼノン (Zēnon, 490?-430? B.C.)
における「矛盾」

→ イオニア地方 自然哲学者の1人
「矛盾」について述べていると
読み取れる。

○ 「論理」と「実際」は異なることがある。

[論理] (logic)

考え方が具現化したもの。但し、現実のものではない。

- ① 思考の形式・法則。また思考の法則的なつながり。
- ② 実際に行われている推理の仕方。論証のすじみち。
- ③ 比喩的に事物間の法則的なつながり。

(※1)

[理論] (theory)

- ① 科学において個々の事実や認識を統一的に説明し、予測することのできる普遍性をもつ体系的知識。
- ② 実践を無視した純粋な知識。
この場合、一方では高尚な知識の意であるが、他方では無益だといった意味のこともある。
- ③ ある問題についての特定の学者の見解・学説。

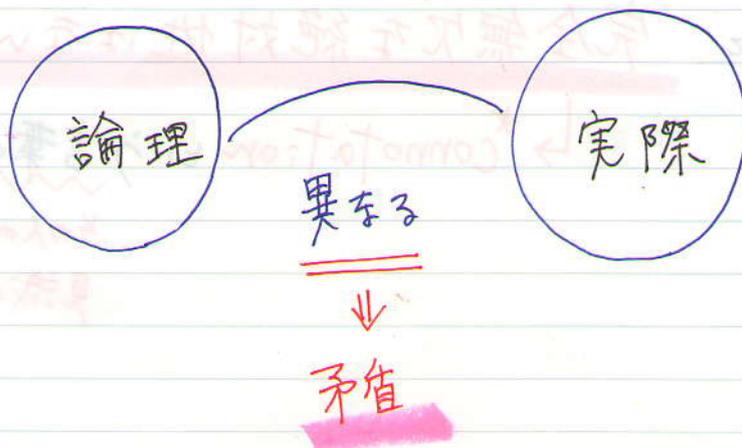
(※1)

2つの
概念の
違いを
確認

[実際] actualization , practice
reality
something real

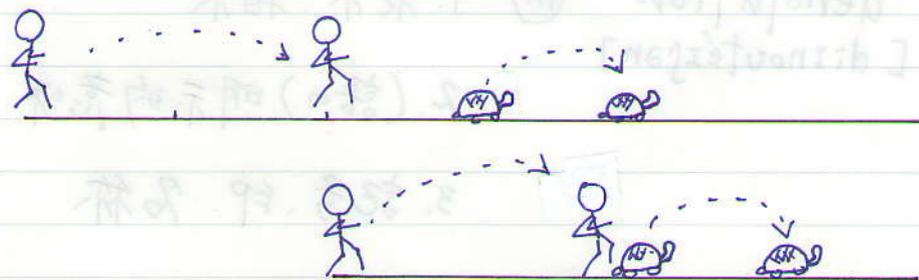
想像や理論ではなく、実地の場合。
実際の有様。事実。

(※1)



。 アキレスと亀の競争

「アキレスは亀の2倍の速さで走れる」



アキレスが 亀のいたところまで走っていくと
亀は常にその半分の距離だけ先に進む。

「アキレスは永遠に亀を追い抜けない!？」

物理学的論理 ... アキレスは亀に追いつけない.

運動学的論理 ... アキレスは亀に追いつける.

「追いつけない」

「追いつける」という思ひ込めは NG.

何らかの考えを100%
信じるのは危険!!

どのような偉大な哲学者が構築した

論理であろうと 完全無欠な絶対性はない.

↳ * connotation という言葉の含み
その人の教養・
見識によって異なる。

★

connotation
[kãnotéijan]

Ⓜ

1. (語・事の) 言外の意味
含蓄・含意・言外にほのめかすこと。

↕

2. (論理) 共示・内包 (intention)

denotation
[dɛnɔutéijan]

Ⓜ

1. 表示・指示

2. (語の) 明示的意味・外延

3. 記号・印・名称

4. (論理) 外示 (↔ connotation)

5. 指摘・言及されたもの

アキレスと亀

ACHILLES and the TORTOISE

パルメニデスの弟子に、ゼノンというひとりの利口な青年がいました。このゼノン

は、ストア派の創始者であるキプロスのゼノンと区別するために、エレアのゼノンと呼ばれます。

このエレアのゼノンは、逆説(パラドックス)を作りだすことにかけてはなかなか腕前で、彼が考えだした逆説のなかには、いまだに人びとの頭を悩ませているものがいくつもあります。次に紹介するアキレスと亀の話も、そのひとつです。

あるとき、アキレスと亀はどちらが速く走れるか、競争することにしました。アキレスは亀の2倍の速さで走れるということから、亀のスタート地点よりも、ずっとずっと後ろのほうからスタートしました。

さて、理屈からいくと、アキレスが亀のスタート地点に到着したとき、亀はアキレスが走った距離の半分だけ前に進んでいるはずですが、そしてその位置にアキレスが到達すると、亀はまたアキレスが走った距離の半分だけ先に進んでいるでしょう。

これをくりかえしていくと、いつまでたってもアキレスが亀に追いつくことはできません。なぜなら、アキレスが亀のいたところまで走っていくと、亀はつねにその半分の距離だけ先に進んでいるからです。

つまりアキレスは、永遠に亀を追い抜くことができないわけです。

「それはおかしい! アキレスはかならず亀に追いつくはずだ。そうに決ま

っている。こんな話はナンセンスだよ」とい

しかし、それをいってしまうと、話の論点を見失います。この話は、アキレスが亀を追

いこせないということを入びとに納得させるためのものではないのです。

アキレスはもちろん亀に追いつきますし、あなたにも、そしてもちろんゼノン自身にも、それはわかっています。

この話がいわんとするところは、非のうちどころのない論理から誤った結論が導きだされることもあり、その場合私たちは、どう考えればよいのかということなのです。

反論の余地がない前提から出発し、一点の誤りもない理屈にしたがって、一歩ずつ慎重に論理を進めてもなお、明らかにまちがった結論にたどりつくことがあるとしたら、世界を論理的に理解しようとする私たちの試みは混乱する恐れがあります。

これまで、アキレスと亀の話の論理にはどこか欠陥があるにちがいないという人はたくさんいました。しかし残念なことに、その欠陥が何であるか、完璧に指摘できた人はひとりもいません。

そこで、20世紀を代表する哲学者のひとり、ギルバート・ライルは、アキレスと亀のたとえ話のことを「多くの点で、哲学的な難問のパラダイム(典型)と呼ぶにふさわしい」といいました。とはいえ、つい最近になって「フェルマの大定理」が解明されたように、この難問もいつかだれかに解き明かされる日がくることでしょう。

非のうちどころのない 論理から 誤った結論が導き だされることもある



哲学的な難問の パラダイムと呼ぶに ふさわしい

[エレア学派] (Elea)

始祖 : クセノフネス

エレア派中心

↓ パルメニデス (Parmenides, 515? - 450? B.C.)

「存在論」を創始

初めて「存在」が主題化

臆見の道 (doxa)
 { ある(存在) = 思惟...真理の道
 あらぬ(非存在)

無責任な推量に基づく意見

宇宙のひとりの不変の存在であるとする見方

↳ 科学的な宇宙観によく似ている

17c. ニュートン

20c. アインシュタイン

ホーバー

ゼノン (Zeno, 490? - 430? B.C.)

・ パルメニデスの弟子。

・ パルメニデスの命題が反駁されたため、
論駁している。

・ 弁証論の創始者 (アリストテレスにおよび伝えられる)

日常的な世界経験の立場から
解決不可能な背理に陥らざるを
えたいということを証明しようとした。

矛盾

① 空間の存在に対する論駁

② 事物の多教性に対する反駁

③ 運動の可能性に対する反駁
→ アキレスと亀の競争

(※3)

<参考文献>

※1 『広辞苑』第6版 (岩波書店, 2008)

※2 グライアン・マギー『知の歴史』(BL出版, 2003)

※3 グラリス・リーゼンクーパー『西洋古代・中世哲学史』
(平凡社, 2006)

3. 「矛盾」の源泉とは何か.

「矛盾」と「矛盾」が重なり合ったとき、
どのように考えるべきか.

世の中は矛盾だらけ

理想 と **現実** は共存できない.

その中でどう理性を駆使するか.

< Beer の例 >

苛酷な労働の
後のビール
至福のひととき



アルコールは
身体に毒だから
飲むべきでない

どちらも 善 とい
矛盾

矛盾の解決法 : 極端を考え同士は破滅を招く.

「ほどほどに」「柔軟に」
融合していくことが 解決の道.

ゼインの考えから
読み取る.

哲学をする \neq 哲学の理論を暗記する。
(written philosophy)

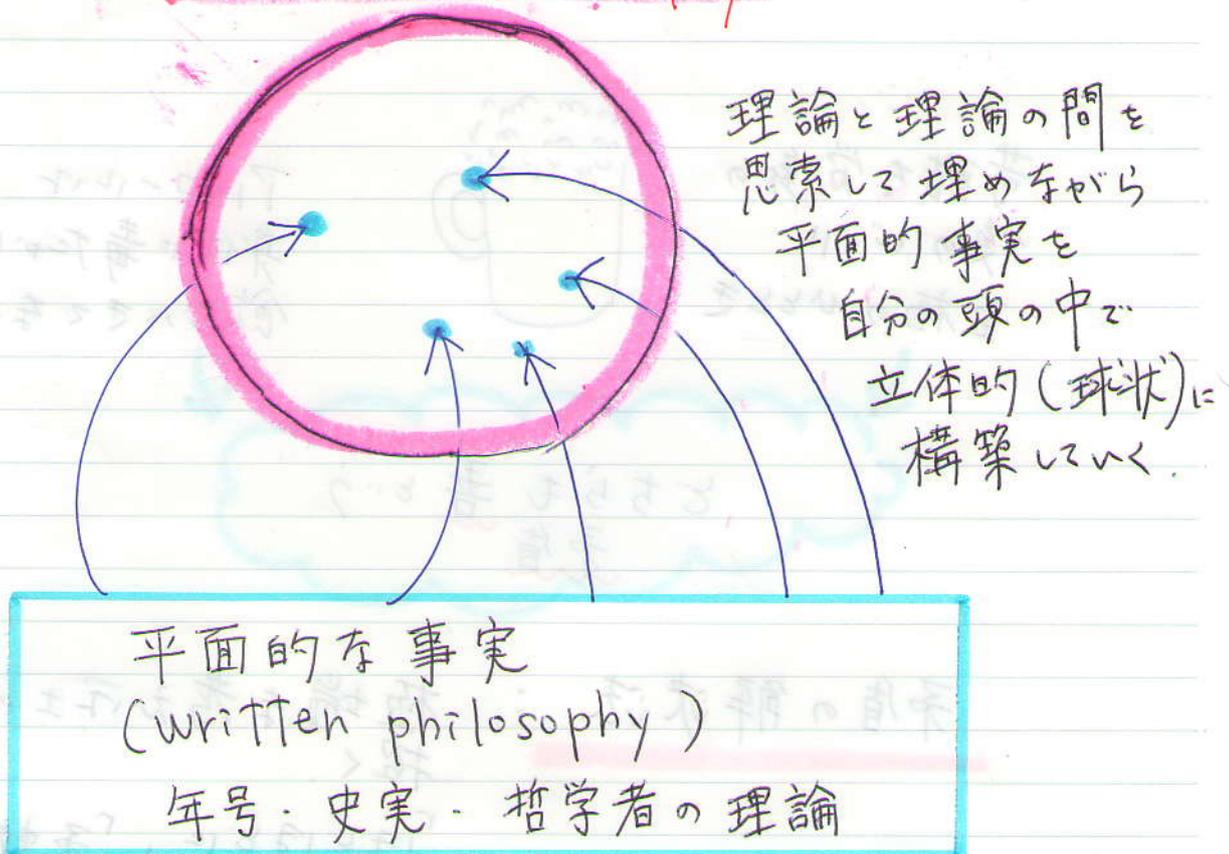
→ (矛盾) (矛盾)
理論と理論の狭間の中で
思索するためには人間には理性が附与されている。

II

unwritten philosophy

まだ解明されていないもの
構築可能な理論 : 今後の課題

unwritten philosophy



4. ニつの概念としての「理性的存在者」

「理性」とは？ 「感性」とは？

↳ 私たちは日常生活において当たり前のように使っていないだろうか？

軽蔑く扱える言葉ではない。言葉の持つ意味の深さを考える必要がある。

「人間は、犬や猫とは違う」

生井利率 『人生に哲学をひとつまじ』
2003, はまの出版 (P.17~)

- ・ 犬・猫 ... 本能のおもむくままに行動
(動物的本能)
- ・ 人間 ... 動物的本能もあるが、知性もある。
自分の本能のみに行動を決めているわけではない。

「考える」という知的行為を
実践するこそが

人間が人間である唯一の証

(P19, 25~6)

1) 「理性的存在者」としての人間

人間存在を、モノを考える存在者として捉える。

2) 「“感性的” 理性的存在者」としての人間

感性的な能力を備えた 理性的存在者としての人間

「**理性**」(人間が考える力) と

「**感性**」(人間が感じる力) は、

対立するものではない。

広義の解釈

究極的には

「**理性**」と「**感性**」は \surd 同じもの

ただ分類しているだけ

(総合的人間学としての)

(1-22, p19)

事物・事例に対して

まず 感じる (原因)



考え始める

深い思索

考え抜く



結論を導き出す

【入事】 ←

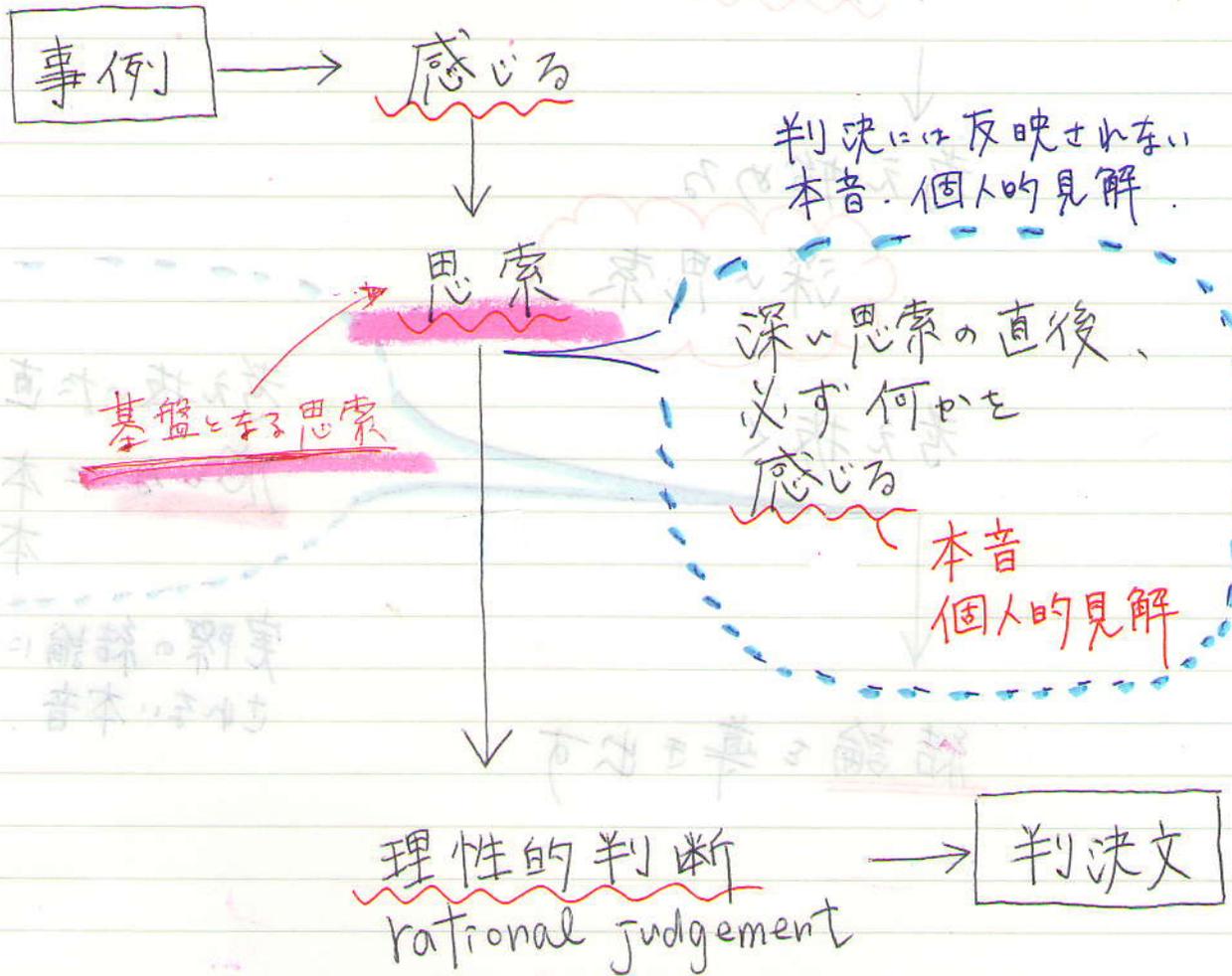
考え抜いた直後
感じる = 本心
本当の答え

実際の結論には反映
されない本音。

【文書評】 ←

この文書評は、著者の意図を正確に捉えている。特に、その論理的な展開と、感情的な訴求のバランスが素晴らしい。読者は、著者の考えを深く理解し、共感することができる。これは、優れた文書評の典型的な特徴である。

アメリカにおける社会正義の源泉 最高裁・判事の判決



「感じた」とは反映されない。
 存せ存ら 思索の結果に
 rationality (合理性) がある。
 法における正義には rationality が
 ある。

この境地に至るには 法曹界で 20年以上の
 経験が必要。

刑事事件には、法律家としての
rationality (合理性) が求められる。

個人的見解 と 社会的 rationality は異なる。

↓ ↓
double standard

人間は「感じて」、「考えた」上で
その人なりに「感じる」存在者

artificial reason

人為的に作られた理性

||

学問・困難・苦勞を重ねて
得た境地。

どの分野においても
一流の一流になるには
構築しなければ
ならない

inherent reason

天賦的 理性

モノが見える人... 目の前が真っ暗闇
(本質) 模索し続けている状態

「何もわかっていない」
||

地に足の着いた生き方

真っ暗で何も見えないという=とけ
祝福されていること

モノが見えると
断言する人

... 実は何も見えていない

わかっていない = 盲目

だから言うことが怖くない

学問の深遠さは、やらばやるほどわかるもの。
やらない人ほど簡単に考えよう。